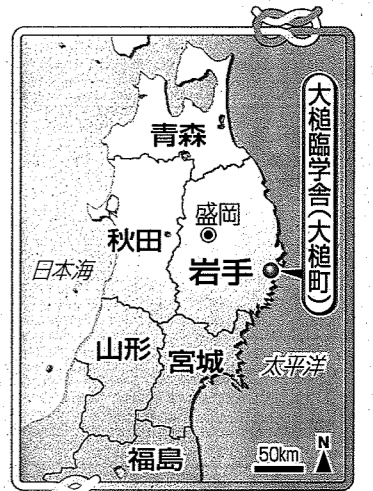


# つながる

32



近くの神社の境内から見下ろすと、鳥居以外に視界をさえぎるものはない。夏草が広がり、ところどころには、庭に生えていたのだらうか赤い花が、遠くにはコンクリートの建物、街の痕跡らしいものも残る。東日本大震災から1年を過ぎた岩手県大槌町。復興はなかなか進まない。

この被災地で「被災を理由に、自分の夢や進学をあきらめる子どもをつまない」を掲げ、無料の放課後学校「大槌臨学舎」が昨年

外からのボランティアが担ったのが川井綾(あや)だ。生徒は中学3年生。高1まで

川井は行政や保護者との連絡、調整、年間6千万円に上る運営費の経理、広報を担当する。自習室にいる子どもの様子も見守る。相談しやすいお姉さんの存在だ。

「話し掛けるときや、保護者に渡す文書では『お父さん、お母さん』という言葉はできるだけ使わない。『うちの人、保護者』にしている。とても繊細だから」と川井。子どもの素顔

## 放課後学校「大槌臨学舎」

### 「勉強でできる環境を」

### 生徒の夢・進学サポート

12月にスタート。東京のNPO法人「エティック」の講師に加え、臨学舎を運営する東京のNPO法人「ロジエクト」として派遣された「カタリバ」の職員や国内

この4月からは中学2、3年生と高校1年生を対象を広げ、約140人を教える

先生は地元にあった塾の講師に加え、臨学舎を運営する東京のNPO法人「カタリバ」の職員や国内



ただ復興の遅れは心配だ。仕事も見つからないまま雇用保険が切れ、親の収入が減っている。「親の世代が精神的にまいってきている。子どもに影響しないだろうか」

多くの若者と同じように、川井も将来に対する漠然とした不安を抱えながら自分にあつた仕事を探していた。仙台市出身、東京の大学を出て3年半、システムエンジニアとして働いていた。仕事に悩んでいたときに大震災があった。

がれき処理のボランティアのため福島県いわき市に通った。被災者の苦しみと感謝の言葉に触れて「復興のためフルタイムで働きたい」と考える中で、教育問題に取り組みカタリバと、人材で活動を支えるエティックに出会った。

右腕プロジェクトは、被災地でがんばる組織の活動や復興を急ぐ企業を助ける



クニツ活動を終え、大槌臨学舎にやってきた中学生と神社境内の右段を上る川井綾(左から2人目)。鳥居の奥には裏手に覆われた被災地が広がる。岩手県大槌町

### 「右腕プロジェクト」が人材

取 材 ノ ー ト

「被災地にはこれまで100万人を超えるボランティアが入り、が

「被災地にはこれまで100万人を超えるボランティアが入り、が

「被災地にはこれまで100万人を超えるボランティアが入り、が

エクトは、学生の体験入社を手掛けてきたNPO法人「エティック」

エクトは、学生の体験入社を手掛けてきたNPO法人「エティック」

エクトは、学生の体験入社を手掛けてきたNPO法人「エティック」

的になった。

「中学では保健室登校だった」が通信制の高校に入った女の子は、得意の写真を生かして川井らを手伝うようになった。少しずつ自分の役割を見つけている。

先生側も学ぶ場

先生側も学ぶ。中高一貫校の講師経験を生かし英語を教える加賀大資(あき)は「子どものやる気が伝わる。だから一言も無駄にできない」。加賀はしばらく教える職から離れていたが、もう一度、教壇に立つという心が強くなった。

臨学舎は今後3〜5年は続ける予定。「大槌のために何かをしたい」という子どもたちの声に心える活動も始める。例えば、地域を活性化するプロジェクトに取り組んでもらい、臨学舎が支援する。学校の授業では得られない経験をしてもらうという狙いだ。

「震災を乗り越え『成長した。こういう自分になった』と語る人ができる人になってほしい」と川井。その願いはきつと通じるだろう。

毎週土曜日に掲載します